

齋藤茂吉（さいとう・もぎよし）



明治二十五・五・五・一四  
昭和二八・一・二  
五、山形県生、医者  
であり歌人。「つゆ  
じも」（童馬漫語）  
等の作品がある。

泉 鏡花（いずみ・きょうか）



明治六・一一・四  
昭和一四・九・七  
石川県生、本名鏡太  
郎、金沢出身。小説  
家『婦系図』（駆行  
燈などの傑作を残  
した）。

泉

鏡花

（いづみ・きょうか）



幸田露伴（こうだ・ろはん）

慶應三・七・一三・二

昭和二三・七・三

○江戸生。明治二  
〇年代の四大作家  
（鶴外・紅葉・逍遙  
の一人、浜通りを南  
から北へ旅したこと  
を記した紀行文「うつしき日記」明30  
もある。また史伝「蒲生氏郷」（大14）に  
も福島のことが記されている。

若山牧水（わかやま・ぼくすい）

明治二八・八・二四

（昭和三・九・一

七、宮崎県生。明治  
四年詩歌雑誌『創  
作』の編者となり、  
同年刊行の歌集『別  
離』により激賞され  
る。生涯に約六千九百首の歌作をなし、十  
五冊の歌集を出した。



## 5 あらたま

齋藤茂吉

短歌 大正一〇年（一九二一）

草木くら記（明33）は、松川浦の地理、美しい地形、風情についての詳しい記述がある。

## 47 酒の歌

若山牧水

短歌 大正一五年（一九二六）

つばくらめちと飛び交ひ阿武隈の岸の桃の花い  
ま盛りなり

など、瀬上、飯坂、福島市街で詠んだ歌一三首を収め  
た歌集。

旅と酒と歌を愛した若山牧水は、大正五年と大正一  
五年とに福島市を訪れ宿泊している。

とくに大正一五年一月には天野多津雄を頼り三春  
町も訪れ、山田屋旅館に泊まっている。旅館中庭には  
時をおき老樹のしづく落つること静けき酒は朝に

こそあれ

の歌碑がある。同旅館には「牧水の間」も残っている。

『宗祇戻し』があつて、芭蕉もこれを見ている。

泉

鏡花

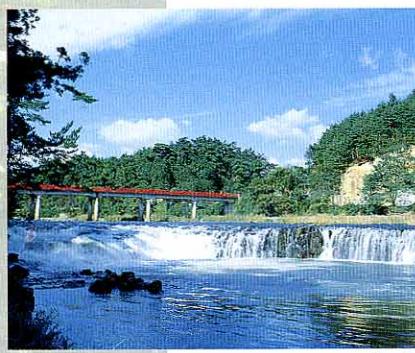
（いづみ・きょうか）

## 6 飯坂ゆき・白羽箭

泉 鏡花

紀行・小説 大正一〇年（一九二二）明治三六（一九〇三）

【飯坂ゆき】は大正一〇年に飯坂温泉を訪ねた時の  
紀行文である。



## 49 白河紀行

飯尾宗祇

紀行 応仁二年（一四六八）

関東に下つていた連歌師の宗祇が、白河の関を訪ねたときの短い紀行文。白河城主の結城直朝の招きによる。「関にいたりては中々言の葉にのべがたし。只二所明神のかみさびたるに、一方はいかにもきらびやかに、社頭神殿も神々しく侍るに、今一かたはぶりはてて、苔を軒端とし紅葉をゐ垣として、正木のかづらゆふかけわたすに……」とあるのを見ると、この「二所の明神」は現在の白坂の関明神の様子を思わせる。旗宿を訪ねたのか白坂を訪ねたのかは不明である。巻末の連歌の発句には「袖にみな時雨をせきの山路かな宗祇」とある。宗祇は芭蕉も尊敬した人で、この宗祇の白河紀行は芭蕉の『おくのほそ道』の旅の先がけとして芭蕉の胸中にあつたであろう。なお白河市内には「宗祇戻し」があつて、芭蕉もこれを見ている。

飯尾宗祇（いいお・そうぎ）

応永二八（文亀二・七・三〇）、室町末期の連歌師。當時第一等の地位である宗祇などは、各地を旅行しながら連歌の普及につとめた。著名な『新撰苑秋波集』を猪苗代兼蔵の協力で編さんした。

## 32 突貫紀行・遊行雜記

幸田露伴

紀行 明治二〇年（一八八七）明治三三年（一九〇〇）

明治二〇年八月二八日夕方、福島に到着した幸田露伴は東京へ帰る汽車に乗るために郡山まで歩いた。その途中本宮で休んだことが『突貫紀行』に記されているが、二本松、郡山間での作句「里遠いざ露と寝ん